通巻514号

紅葉坂

教会だより

2012年4月号 No.1
横浜市西区宮崎町1
日本キリスト教団
紅葉坂教会
牧師 岩橋常久

説教

「悲しむ人たちへ」

岩橋常久

マリアは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいるところへ行って、このことを知らせた。
マルコによる福音書16章10節

復活のイエスにであった私たちが一番最初にしたい願いは「泣き悲しんでいる」人たちに復活されたイエスを伝えること。嘆き悲しむ人たちはいつでもどこにでもいる。とくに今は東日本大震災の被害者たちを覚える。

イエスの弟子たちの嘆き悲しみは次の理由から。①イエスを失った。②イエスを裏切った。③自分たちの今後の不安（この事態を招いた自分の決断の後悔等）。④仲間とのつながりがバラバラの不安。彼らの今あるつながりは、イエスを裏切ったという負のつながり。これは心の意味の、充実と希望の喜びをもたらすつながりではない。

しかし、マルコでは、すでにイエスの十字架刑以前に彼の受難物語が進むにつれ、彼の弟子たちのつながりは徐々に切れていった。ユダの裏切りから弟子たちの逃走、そしてペトロのイエスの否認。彼らは、権力の強まる圧力の下、イエスの弟子の意味が失われ、無力感に支配され、イエスの殺害がつながりを決定的に切った。

つながりが切られるのは、イザヤの時代も起こった。その状態に対して、イザヤ書は、ある無名の人が神の霊にとらえられ、遣わされたと宣言する。目的は、①貧しい人に良い知らせを伝えるため。②打ち砕かれた心を包むため。③捕らわれた人に自由をもたらすため。④つながれている人（幽閉されている人）には解放を伝えるため。⑤嘆いている人々を慰め。⑥灰の代わりに冠を、嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美をもたらすためである。このようにされた人たちは、どうするかというと、「とこしえの廃墟を建て直し、古い荒廃の跡を興し、廃墟の町々、代々の荒廃の跡を新しくする」、つまり、生活基盤を復興する。イスラエル共同体の回復、作り直し。今、東北大震災と津波、放射能被害の瓦礫と汚染から私たちの国、各自治体、地域社会、家族などの大から小までの共同体の回復が急がれている。破壊されたものを復旧させる、あるいは破壊されないためにより強い絆の共同体を作ろうとするのは誰もが願うこと。その場合、一般的には経済的復興が叫ばれ、生活基盤復興、行政機能、教育環境の復興が急がれる。信仰共同体では、神と人々、人々と人々とのつながりの回復が急がれる。

マグダラのマリアは、かつてイエスから彼女をバラバラにする七つの悪霊から解放された経験があった。その彼女は、おそるおそる出会ったがイエスの墓に近づき、復活されたイエスに出会った。最初は誰も彼女の報告を信じなかった。しかし、神の霊は、徐々に彼らを捉え、彼らには力がみなぎり、イエスが生きて自分たちと共におられることを経験していく。

イザヤ書61章に語られている共同体復興を、エゼキエル37章は枯れた骨が再び人間になるという幻で表現する。そこには、共同体という一つの体の復活が、枯れた骨が神の霊によって再び生きた人間になるという幻で語られている。神の霊、神からの命が風のように枯れた骨に吹くと、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは、神の霊によって立った。

私は30代の時、某教会に赴任した。その教会はある問題で三つのグループに分かれて意見が衝突していた。他の牧師たちは赴任を断った。私はそこに赴任した。最初の日曜日がイースターだった。私はエゼキエルの枯れた骨の復活を語った。バラバラになった骨が神の霊によって復活したように、この教会にも同じことが起こるようにと願う正面切っての説教をした。最初の半年は、その教会の人々に笑顔がなかった。半年過ぎて、笑顔ができてきた。問題はなお継続していたが、笑顔は緊張を和らげ、つながりが感じられるようになった。

マリアは、イエスを見たかった。この思いが、復活されたイエスとの出会いを招いた。そして、泣き悲しみから立ち上がった。私たちも、ともかくイエスに会いたい、そして、復活されたイエスの霊によって泣き悲しむことから自分の足で立ち上がりたい。

（2012年4月8日 礼拝説教要旨）